

# 窓ぎわのオットット君

北 籾 和 夫

黒柳さんが「窓ぎわのオットちゃん」という本を出したのは君も知ってるだろう。面白くて、いい本だと、アツというまにベストセラーになったんだけど、僕はまだ読んでいない。

ところで、読んでこともない本をなぜ持ち出してきたのかと言うと、理由があるんだ。

その理由は単純なんだけど、つまり、その本の名前を聞いた時、僕は窓ぎわのオットット君の事を思い出したんだ。僕はなんだか急になつかしくなってしまうって、あのオットット君の顔を何度も思いだしてみた。すると不思議な事なんだけど、もう何十年も前の、今まで思い出しもしなかったオットット君のことが、その表情から、少し緩慢な身振りまではっきりとよみがえって来て、僕の頭の中で動き出したんだ。

オットット君がなぜ窓ぎわのオットット君と呼ばれるようになったのかは、もう少し後で話すけれど、オットット君の本当の名前が何だったのかは、どうも忘れていないらしい。

大体、一度でも記憶という形で頭の中に残されているものなら、ええつと、こう、こういう感じの名前なんだがなあって風に、名前の雰囲気ぐらいなものには頭に浮ぶものだけけど、オットット君の場合、ピクリとも脳みそが動かないんだから思いだしようもない訳だ。

その代り、オットット君というあだ名は、こちらから迎えなくても、オットット君の方から飛び出して来たって感じだから、僕は学校で、オットット君の本名など呼んだ事がなかったのかもしれない。

そう言えば、僕達の担任だった山地先生もオットット君の事をオットット君って呼んでいたのを僕は今思い出した。

給食の時だったんだけど、その頃の給食は今のように入白な牛乳なんかじゃなくて、脱脂粉乳って言って、今ではブタの餌にするんだそうだけど、それを溶かしたミルクが時々配給された。なんだか茶色があったミルクで、妙に粉っぽい味がして、僕達の半分はそのミルクが嫌いだったんだ。でも山地先生は「残しちゃいけません」っ

て、こわい顔して言うものだから、先生がいる時は無理をして飲む事にしていた。

僕はそんな時息を止めて、グッと一息に飲み込むんだけど、よけいにまずく思えて、ミルクの嫌いな連中は、お互いに目を見合せて顔をしかめたものだ。もちろん山地先生にわからないようにそっとだけど。それが面白くて、僕はミルクのまずいのを我慢したんだ。

ところが、オットット君はミルクを飲まなかったんだ。「どうしてミルク飲まないの、残しちゃいけませんよ」って、やっぱり山地先生はオットット君に注意した。

「このミルク嫌いだもん」そう言っていて、オットット君は机の上の空になったおかずの皿を、人差指でクルクル回し始めたんだ。すると、その事が面白くなったんだらうオットット君は皿を机の上で回すのに熱中した。

先生はオットット君の手を取って、

「そんなきたない事をしちやいけません」って言ったんだけど、

「きれいだよ先生、ほら、コマみたいなんだ」と、オットット君は又皿を回し始めた。

先生は又手を取って、「この手をごらんさない、ソースで汚れてしまったじゃないの、さあ、そんな行儀の悪い事をしないで、ミルク、のんでしまいなさい」って、優しく言ったんだ。

オットット君はしばらく自分の手を見ていたよ。オットット君の人差指はソースで赤くなっていったんだ。それでオットット君はその指をペロリとやった。それからもう一度、今度は指の付け根まで口に入れて、モゴモゴとやった。やっぱり先生はみかねて注意をしたよ。

「そんな事してはいけません」ってね。するとオットット君は「きれいになったよ。ほら」って言って、得意そうに人差指を立てて、先生の目の前に突き出したんだ。

さすがに先生は、少し怒ったようだった。優しい山地先生の声が、ちょっとパリンと硬くなったんだ。

もう大体の想像がついていると思うけど、山地先生って、きれいな女の先生なんだ。まだ結婚していないっていうことだったから、きっとまだずっと若かったんだらう。

山地先生は、いつもはとても優しいんだけど、声がパリンとなると恐かったから、僕はもその時、ピリッと背骨が伸びたような気がした。

「ばかな事しないで、ミルク飲んでしまいなさい、残したりすると偉い人になれませんよ」そう先生が言ったら、オットット君はコックリとうなずいたんだ。そしてゴクンゴクンとミルクを飲みほしてしまった。

僕はどうしてだか知らないけど、その時ホッとしたり。実際教室の中に又なごやかな空気が流れ始めたんだ。

その時先生、言ったんだ。「オットット君、偉いわね」  
って、オットット君はニッと笑ったよ。その齒ぐきのあ  
たりには、まだミルクの白い液がうっすらと見えていた。  
僕はその時のオットット君を忘れないし、確かに山地先  
生はその時、オットット君の事を、オットット君って呼  
んだんだ。

なんだか長い話になってしまったけど、学校ではみん  
ながそんな風にオットット君の事をオットット君って呼  
んでいたんだ、きつと。だから僕が、オットット君の本  
当の名前を知らなくても仕方ない事なんだと思う。

オットット君が僕達の小学校にやって来たのは、四年  
生になった春だったと思う。その頃僕達の間でドッチボ  
ールというのがはやっていて、休み時間になるとドッチ  
ボールを持って、グラウンドで毎日遊んでいたんだ。ポー  
ルに当てられないように逃げたりボールを受けとめたり、  
今度は相手にボールをぶっつけたり、とてもスリルがあ  
って、僕は先を争って狭いグラウンドの取りっこをした。

話が前後したけど、初めてオットット君が学校にやっ  
て来た時、僕はオットット君のことをとつても面白が  
った。正直に言うけれど、僕はオットット君のことを  
田舎者だって、ばかにしていたんだ。

実際、オットット君はその時白くあせたようなほこり  
っぽい学生服を着ていたし、運動ぐつもあまりきれいじ

やなかった。それに何と言っても顔が面白かったんだ。  
まん丸い牛乳びんの底のようなメガネをかけて、正面か  
ら見ても鼻の穴が二つまあるく見えたんだからどうしよ  
うもない。その分、口がポカンとあいていて、黄色い歯  
がいつも見えていた。

その顔を突き出すようにしてオットット君は歩いた。  
それがなんだかオットセイの歩くのに似ているって誰か  
が言ったら、本当にそう見えたものだ。

オットット君の呼び名がそこから来たのかって言えば  
そうでもないんだ。

オットット君は大変な近眼だったから歩くとよくもの  
におつかりそうになったり、教卓に置いてある花瓶など  
を倒したりした。その度に、オットットと言うのが、オ  
ットット君の口癖だったんだ。だから僕はいつのまに  
かオットット君と呼ぶようになっていったんだ。

最初はばかにした名前だったんだけどそれがいつか僕  
達のあいだで、とっても好きな名前になっていったんだ  
よ。

オットット君は頭が少し弱いんだって僕達も思ってい  
たし、親同士がそんな話をしているのを僕はきいたこと  
がある。そのためだったのかは知らないけれど、オット  
ット君は何を言われても決して怒らなかつた。その代り  
いじめられて泣くことは時々あった。ふしぎだったのは、

その度にきつとオットット君をかばってやる子が現れたことだ。

その子がいつも同じ子だったかというところ、そうでもなく、この前にいじめていた子が今度はオットット君をかばっているという風にして、いつの間にか僕達の間で、オットット君をいじめるのは悪い子だって取り決めが出来ていたように思うのだ。

オットット君が学校にやってきた日から、僕達はすぐ一緒にドッチボールをした。一目見たときから僕は想像がついていたんだけど、実際やってみると、オットット君は想像以上に運動オンチだった。

ボールを投げられると、必ず当ってしまおうし、もちろんボールを投げると、どこに飛んでいくかわからなかった。逃げる時なんか、必ず誰かにつつかって、コート隅まで逃げて行くことが出来ないのだ。大体、相手側にボールがわたったら、みんな背中の筋がスーッと冷えるように緊張して必死で逃げるんだけど、オットット君はちっともそんな風じゃなかった。

ボールが味方の方にあっても、そうでなくても、まるでおかまいなくコートの中をウロウロとして人とぶつかるばかりで、僕はオットット君が緊張するところを一度もみたことがなかった。

それでもオットット君は楽しそうだったから、僕はど

うかするとオットット君の事がわからなくなったし、馬鹿にしていたのも事実だ。

オットット君が運動オンチだってことは大体想像してもらえと思うけれど、一番その事がわかるのは体育の時間だった。

オットット君は大きな体をしていただけで、からっきし力がなかった。力がなかったと言うより、僕には力の出し方を知らないんじゃないかって思う事もあったんだ。

それは体力測定の時だったんだけど、みんな腕立伏や鉄棒をやらされた時の事だ。僕は強い方じゃなかったけど、それでも腕立伏は十五回と、けんすいを六回はやれたし、みんなは大体それよりいい成績だったんだ。どんなに悪い子だって何回かはやる事が出来た。

それでオットット君の番になった訳んだけど、どうした訳かオットット君はうつ伏せになったままピクリとも動かないんだ。

体育の先生が力を入れる入れろって、顔を真赤にしてどなるんだけど、肝心のオットット君はバッタのようにうつ伏せになったままだうしても体が上に上がらない。顔はピツタリ地面につけたままでもちっとも体に力が入らないようなんだ。

体育の先生は、オットット君のピョコンと曲げた腕を

たいたたり、尻をたたいたりして、さあやれさあがなばれって、そう言うたびに自分の体にばかり力が入って、長い間そうやってオットット君に号令をかけていたものだから、とうとう先生の方がハアハア息をして地べたに坐りこんでしまった。

「お前やる気があるのか」って、体育の先生は耳のところまで真赤にしてオットット君を叱るんだけど、オットット君はポカンと口を開けて、笑っているように見えるんだ。

だから余計に体育の先生は腹を立てたんだろう。「バカヤロウ、こんな時に笑っているやつがあるものか、歯を見せるな」って怒鳴ったよ。

オットット君はその時口を締めただけで、先生が、もっとやる気を出さなけりゃいけないと何とか注意をし始めると、オットット君の口が又開いてきて、黄色い歯がニッと見えて来る。そしてなんだか笑っているように見えるんだ。

僕はこの時、オットット君は出っ歯なんだって事を発見した。

オットット君は決して笑っているんじゃないんだ。努力して口を締めても、先生の話の話を聞いているうちに力がゆるんで元の顔に戻ってしまっただけだったんだけど、腹を立てた先生は余計に腹を立てるばかりだったよ。

先生の体がぶるぶる震えているのが僕にもわかった。それを見ている僕達の方が恐くなって、体を硬くしてじっと二人を見詰めていたというのに、オットット君の方は、いつものようにのんびりしていて、自分が叱られているのにも気付いていないような風なんだから、僕はなんだか体育の先生がかわいそうになってきたものだ。

体育の先生は本当に腹を立てたのだと思う。

先生は僕達がいるのも忘れたようだった。オットット君を学校の中で一番高い鉄棒の下に連れて行って、飛び飛び飛び付けたどなるんだけど、僕達の中でもあの鉄棒に飛び付けるのはわずかしかなかったんだから、オットット君に出来るわけがないのに、かんしゃくを起した先生は、そんな事もわからないらしい。

オットット君は、鉄棒を見上げて、飛び上がろうと膝を少し曲げるんだけど、肝心の足が地面から離れないんだ。

とうとう先生オットット君を後ろからガッシリとつかんで、オットット君を持ち上げ、鉄棒につかまえた。先生は下から、けんすいだ、けんすいだって怒鳴るんだけど、やっぱりオットット君はダラリと垂れ下がったままで動かないんだよ。

「力を入れよ、歯を食いしばってみよ！」

先生はもう頭から火を噴き出すような声を上げるんだ

けど、オットット君の表情は、やっぱり力んでいるようには見えないんだね。とうとう先生はオットット君を鉄棒から下ろしてやりもせず、出来るまでそうしていろいろ言いすてて、運動場から引き揚げて行ったんだ。

途中で僕達の事に気付いた先生は、今日の授業は終了だって、拳を上げて僕達に伝えた訳だ。

僕達は呆気にとられて、それでも鉄棒にぶら下がったままのオットット君を、半円に取り囲んで見上げていた。

誰かが、「もういいよ、下りておいでよ」って言ったたら、ドサッと、石炭袋のように砂場に落ちて来た。

「大丈夫」って、女の子が近寄ったから、みんなが一斉にオットット君を取り囲んだ。

オットット君はやっぱり笑ったような顔をして、心配そうなみんなの顔を見ていたが、今度は本当に笑って、けんすいって手が痛いねって言ったんだ。

みんなは、なんだか可笑しくなって砂場で丸くなったまま大きな声で笑った。中には体育の先生の物真似をする者も出てきて、本当に大笑いになった。

オットット君はみんなの英雄みたいだったよ。英雄と言うか、とにかくそれからオットット君はみんなの人気者になったんだ。

体育の先生はそれから、オットット君の事を怠け者だっと思うようになったんだと僕は思う。

オットット君がいると必ず「怠け者は一番悪い人間なんだ」って、みんなに言っただけで聞かせるんだ。

僕は、心の中で、一番悪い人間は人殺しだっと思ってたから、これはオットット君の事を言ってるんだなっですぐわかったけど、オットット君の方は相変らずの表情をして先生の話を聞くものだから、先生にしたら張合いがなかったんだらう。

オットット君はでも、話をよく聞いているんだ。いつもポーとした顔をしているから、わかっているんだらうかって最初は僕も思ったんだけど、時々僕なんかも聞きのがしている事を覚えていて、驚かされる事がある。

要するに、あの表情がオットット君の普通の顔なんだ。まだオットット君の寝顔を見たことはないけれど、オットット君はきつと笑いながら寝ているんだって僕は思ったことがある。

それはそうと、オットット君の事を怠け者と思った体育の先生は、なんだかオットット君に対して随分厳しくなったようだった。

あれは跳箱の時間だったんだけど、今も忘れることのない出来事があったんだよ。

四年生になった僕達は五段跳びをさせられるようになった。

五段跳びというのは、わかっているとと思うけれど、跳

箱を五段に積んで跳ぶことなんだ。

三年生の時には四段までだったんだけど、五段になるとんだかすごく高くなったように思えて、僕は最初、少し恐い気がしたものだ。

実際五段に積んだ跳箱は僕の胸よりも高いんだ。でもそれを跳び越えようと、なんだか去年よりもずっと偉くなったような気分になって、三年生が四段跳びをしているのを見ると、可愛いなあなんて思ったりしたものだ。

ところでオットット君だけけど、背丈は僕より二センチも高いくせに、五段を跳び越せないんだ。

跳び越せた子は休んでもいい事になって、だんだん跳び越せない子が少なくなつて、やっぱり最後にオットット君が残ってしまったんだよ。

みんなは十メートルぐらい先から、さつと勢いをつけて走り、ボンと踏切板を蹴つて、跳箱のてっぺんに手をつけて、パッと足を開いて跳び越えるんだけど、オットット君のは少し変なんだ。

みんなと同じように十メートル先から走るんだけど、跳箱の近くに来るとスピードがゆるくなつて、踏切板の上でピタッと止つてしまうんだ。それから跳箱の上に手をあてて、踏切板の上で何回もピョンピョンやるばかりで、一向に体が跳箱の上までいかないんだ。

先生は何度もやり直させるのだけど、オットット君は

何回やっても跳箱の前でピタッと止つてしまつて、それからピョンピョンやるばかりだった。

又、先生はかんしゃくを起し始めたよ。

「どうでもいいから跳箱の上まで登れ、それぐらい出来るだろう」と言つた。

オットット君はなんとかしてよじ登ろうとするんだけどだめなんだ。うんしょって腰の所までは体を上げるのだけれど、そこからどうしても上にながれないでズルズルそのまま尻から落ちてしまうのだ。

僕はそつと先生の手を見たら、やっぱり又、ぶるぶると震えていた。

何度かそんな事をしているうちに、先生はとうとうたまりかねて、跳箱に上がろうとしてモコモコしているオットット君のお尻をボンと突き上げたんだ。すると、ようやくオットット君は跳箱の上に馬乗りになることが出来たんだ。

誰かが手をたたいたら、みんながやったやつたと声をかけた。

先生は「さあ、下りてみる」と言つてイライラしたような声で言つた。

オットット君は、跳箱にまたがったまま股の所に両手をつけて、うんしょうんしょと前の方へこいで行つたんだ。

先まで行ったら後はピョンと跳び下りればいいんだから簡単だ。

跳箱の上に馬乗りになったら女の子だって三回も前にこげば先の方に行けるのに、オットット君は六回もうんしょうんしょとこいだ。そして最後にもう一回こごうとして両手を前にやったら、もう跳箱がなかったんだ。

オットット君はそのままドサッと、顔から先に落ちてしまった。

登る時にはペタンとお尻から落ちて、今度はドスンと顔から落ちたんだから、みんなは一瞬ゲラゲラ笑ったよ。でもオットット君はそのまま足をブラブラさせるだけで動かないから、もう笑いごとではなくなった。

さすがに体育の先生は顔色を変えて、オットット君を助け起した。

下にはマットが敷いてあったから少しはよかったんだけど、それでも、オットット君のメガネのつるは折れてしまうし、何よりびっくりしたのは、鼻血が一杯出ているんだ。女の子はキヤッて悲鳴をあげるし、先生は急いでオットット君を背負って保健室に運ぶし、大騒ぎになったんだ。

幸いオットット君は大した事がなかった訳なんだけど、それからはさすがに体育の先生も、オットット君にだけは、むりを言わなくなったんだよ。

オットット君は、本当に不思議な子だった。

僕なんか、先生に叱られるのが恐くて仕方がなかったし、先生にほめられるのが大好きだったから、先生が見ていると、いつもいい子にならなけりゃと思ったんだ。でもオットット君はそうじゃないんだ。

体育の先生の話でもわかってもらえたと思うけど、オットット君は先生に叱られても、本当に平気なんだ。それに、先生の気に入られようなんて事、一度だってした事がなかったんだもの。

僕連子供は、どうしたら先生に気に入ってもらえるかっていうのが毎日の生活の常識だったし、大体みんなが考えつくのは、先生の言う事を聞く事と、テストの点を取る事ぐらいだったけれど、それでも、そのために少しぐらいは努力したものだ。

もちろん、テストの点を取って言うのは、そううまくいくものじゃなかったんだけど。

四年生になると、ローマ字の授業が新しくふえる。みんなも経験あるとおもうんだけど、あれを覚えるのがなかなか大変だったんだ。

ある日テストがあった。

僕はテストのあるのを忘れていて、前の日に勉強して行かなかったから、その日のテスト、全然わかりゃしない。



ローマ字っていうやつは、覚えておかなけりゃ、てだ  
らめさえ書けないんだから、僕は本当に困ってしまった  
よ。なんだかこう、腹の中がグラグラ煮え立つように思  
えて油汗が首から流れて来るように思った。0点なんて  
取りたくないよ、誰だって、だから僕はカンニングした  
んだ。生まれて初めてのカンニングだったから、すごく  
ドキドキしたけれど、なんとかうまく行ったよ。

小学校の机は二人がけの机だったから、横の子の答案  
用紙がよく見え込んだ。僕の隣に座っていた子はキミち  
ゃんといつて、頭のいい子だったから、ラッキーだった  
んだ。

その日のテストは七十五点だったよ。それでも僕はカ  
ンニングがばれないだろうかって、いつもドキドキして  
いたから、無事にテストを返してくれた時はホッとした  
んだ。

それからオットット君が呼ばれた。

山地先生は、「オットット君だめじゃない今日は放課後  
残りなさい」って言った。

オットット君はコックリうなずいた。

クラスのみんなはクスッと笑ったよ。

テストを返してもらった時っていうのは本当にいつもに  
ぎやかなものだった。だってみんな点数の事が気になる  
ものだから、そっと自分の点数を見て、ウワーって喜ん

だり、そっと折り畳んでカバンかポケットか本の間には  
さんでしまったりするんだ。

女の子なんか、テストを返してもらおうとそのままたつ  
折りにして自分の机に帰って来るんだ。そしてそおっと  
点数の書いている所だけ開いて見る。ひどいのなんか、  
それをわざわざ教室の角の所まで行って、後ろ向いてや  
っている。

それに男の子などは、何点だ、何点だって言って自分  
のテストをヒラヒラさせながら聞き回るんだ。

大体中位の子が一番さわがしくって、点数の比べっこ  
をして、一点勝ったとか三点負けたとか言って教室中を  
かけまわる。そうして自分よりも悪い点数の子を見付け  
るのが、みんな一番嬉しかったんだ。

だから、オットット君がテストを返してもらった時、み  
んながクスッと笑ったのはそういう理由もあったんだよ。  
でも僕は、その時ばかりは笑えなかったし、なぜかオ  
ットット君に悪い事をしたような気がして胸が重かった  
んだ。

放課後になってオットット君一人が教室に残された。

山地先生は、とっても熱心にオットット君をみていたよ。

僕はチョッピリ涙ましい気がしたんだ。

オットット君の補習が終って、僕はその日、オットッ  
ト君と一緒に帰った。オットット君の家は僕の家の近く

だったし、学校帰りはよく一緒にになったから、一緒に帰るのはもちろんその日が初めてじゃなかったんだけど、こんな風にオットット君を羨しく感じた事はなかった。

「ねえ、オットット君、テスト何点だったの」って僕はオットット君に聞いた。

「うん、三点」そう言っただけで、オットット君はカバンからテストを取り出して見せてくれた。

ペケペケが一杯の答案用紙に丸が一つだけあった。僕にはその丸がとっても印象的だった。

その力強い丸はいかにも堂々としているしキラキラ輝くような赤色に見えたんだ。

でも僕はオットット君がこんな点数を取って、どうして平気な顔をしていられるのか、ちっともわからなかったし、それを聞く訳にもいかなかったから、心の中ではオットット君は本当のバカなんだって、やっぱり思ってしまうのだった。

オットット君が、テスト用紙をていねいにたたんでカバンに入れるのを見て、僕は聞いてみた。

「テスト家で見せるの？」

「うん」

「家で何も言われない？」

「うん」

「へえー本当」

「うん、父さんの時はもっと悪かったんだって」

「叱られないの」

「うん」

「三点でも？」

「丸があったらほめてくれるよ。父さんはもらったことなかったんだって」

「ふーん」

僕はなんだかオットット君のことが又羨ましく思ったりした。

オットット君はいつもそんな風だった。そんな風だったから、僕はオットット君が悔しかったり、怒ったりしたのを見た事がなかった。いじめっ子が、オットット君をどんなにからかったって、オットット君には一向に堪えなかったものだから、からかう方がばからしくなってくるんだろう。

だからオットット君の周りはいつも平和だった。

そのオットット君がたった一度つきりだったんだけど大変な喧嘩をした事があったんだよ。

僕達の学校には、校庭の隅に一本の大きな桜の樹と、

二本のイチョウの樹が並んで立っていた。

三本の樹はどれも学校の屋根より高かったし、幹は太くて、とても一人で抱え切れないものだった。

元気のいい枝振りには若々しい気骨があったし、木葉

は、機敏に季節の移り香に感応した。

たとえば、春には新しい学年になったそれぞれの子供達の歓声が、桜の樹の花びらの一枚一枚をうきうきさせ、僕達は樹の下に駆けて行つては、なんだか暖かい雪んこが降つて来たような嬉しさを体一杯に表して、毎日をあきることがなかった。

そして夏には、時々蟬がやつて来て、大きな声で僕達を誘つた。大抵は樹の幹に止っているのだけれど、僕達がどれだけ耳をすませてみても、どの樹から聞えて来るのかわからなかったし、もし運よく蟬を見付けても、僕達の背丈ではとても登れない樹であつたから、捕えられない訳でもないのに僕達は決して、腰を屈め、今にも飛び掛つて行きそうな格好で樹に近付き、そつと見上げては胸をわくわくさせるのだった。

秋には、イチヨウの葉っぱが、黄色い扇のようにハラハラと落ちた。いつの間にか地面が黄色く色付いて僕達はなんとなくその上を歩きたくなくて樹の傍に集まつた。そして、右側の、少し痩せっぽちのイチヨウの樹は、やがて沢山の実をつけて、僕達に秋の香をプレゼントするのだった。

そして冬には、骨となった枝が空に向かって指差しながらゆれた。僕達がストロブに石炭を投げ込む間に、小枝はヒューッと鳴くのだ。

こうして一年は僕達の気付かない所で、しかし確実に僕達の心の中に何かを語りかけながら過ぎていった。オットット君も又僕達と共に一年をこうして感じたにちがひなかった。

だってオットット君は、勉強の方はうまくいかなかつたけれど、木や草花とお話するのはとても上手だったんだもの。だから沢山の名前を、もちろん草や木のなんだけど、知っていて、遠足の時だったけれどオットット君はいくつも草の名を覚えてくれたりしたんだ。

もっとも、今から思えばそのほとんどがオットット君の名付けたものだったんだけど。たとえばオミナエシをチョボチョボ、やぐるま草をカラカミ、ハコベをシロコッペと言うふうになつた。

どういう意味でシロコッペなのかは知らないけれど、僕は今でもハコベを見るとシロコッペという名前を思い出してしまうんだ。

そうして再び春がきて、オットット君も僕達も五年生になつた。校舎の裏の隅っこ柔らかな土の上にも、青い芽がやがて可憐な花を咲かせ始め、時折チョウチョウも花芯に身を休める。

その春が夏に移ろうとする、物憂い午後のある晴れた日だった。校庭からは子供達の声がどことなく聞延びしたように聞え、ゆつたりと眠いのだ。

職員室ではきつと先生達も、コックリコックリをやっていたらう。

突然、けたたましい泣声が校舎の裏から聞えて来た。それと同時に、二、三の子供達があわてて飛び出してきた。

それは僕達のクラスのヨシオ君とイチヒロ君だった。イチヒロ君は、僕達を見付けると、「大変だ大変だ大変だ」って、なかなか肝心の事が言えないくらいに慌てている。ヨシオ君は「先生呼んで来るから」ってそのまま職員室の方へすつとんでいった。

「どうしたんだい」って僕はイチヒロ君を落ち着かせるために聞いたよ。

「た、タカシちゃんが大変なんだよ、オットット君が、オットット君が」と言うなりイチヒロ君は又校舎の方に走り出した。

僕達もイチヒロ君の後を追った。

校舎の裏側は金網塀との間に、細長い空地が出来ていて、まだ高い午後の日差しが地面を白くしていた。

そこに二人がもつれて、もがいているんだ。そのうちの一人がワンワン泣いていたんだけど、それがタカシ君だった。

クラスの一番のいじめっ子で、さっきのヨシオ君とイチヒロ君は、タカシ君の子分みたいなものだったんだけ

ど、そのタカシ君が大声で泣きわめいているんだから、僕達は驚いたよ。

それよりもっと驚いたのは、オットット君がタカシ君の肩に、カブリと犬みたいに噛み付いている事だった。オットット君は顔を真赤にしてタカシ君に噛み付いているんだ。タカシ君は抵抗も出来ず、ペタンと坐り込んで泣いているのだった。

あまりに思いがけない光景だったし、僕達はどうすればいいかわからなかったので、ただ、遠巻きに見ているばかりだったよ。

そのうちに先生が駆けてきて、ようやく二人は離された。

オットット君はすぐ興奮していて、先生に離されてもまだタカシ君をにらみつけていたし、タカシ君の肩は、オットット君の歯形がくつきりと残り、血がにじみ出ていたよ。

「一体どうしてこんなことになったの」って山地先生はタカシ君の肩をハンカチで拭きながら二人に聞くんだけれど、やっぱりタカシ君は泣くばかりだったし、オットット君はまだタカシ君を噛んでいるつもりみたいに歯を食いしばっているだけなんだ。

「どうしてこんな事になったのか、誰か知っている人いないの」

山地先生が僕達に向かつて言ったよ。

するとイチヒロ君が、すごく真剣な顔をして言ったんだ。

「僕知ってる」って。

「教えて頂だい」

「うん、オットット君がね、タカシ君に噛み付いたんだよ」

「それで？」

「それだけけど」

「ばかね、見ればわかるでしょう。どうしてオットット君がタカシ君に噛み付いたのか、誰か知っている人いないの」

僕達は互いに顔を見合わせるばかりだったよ。本当にこんな事って考えられない事だったんだから。

「ヨシオ君、あなた知ってるんでしょう？」

ヨシオ君が先生を呼んできたんだから、先生はヨシオ君が一番知っていると思ったんだ。

ヨシオ君の話は、自分の好きな所からどんどん話していくものだから、大体終りだなって思う頃に、もう一度話の順番を組み合せながらつじつまを合せなければならなかったんだけど、要するにこう言う事だったんだ。

校舎の裏側は普通子供達があまり通らない所だったんだけど、それだけに静で、校舎のねきに生えている草の

類もののびのびしているように見えた。

そこにオットット君が一人でうずくまっていたんだ。

ヨシオ君達が近付いてみたんだけど、オットット君はそれには気付かないで、何かお話をしているんだって。

ヨシオ君達はクスッと笑ってオットット君ののを見ていたんだ。

するとオットット君は小さな草の葉をつまんでみたり、顔を地面にすりつけるようにして、葉っぱの裏側を眺めたり、鼻を近付けて、臭をかぐような格好をして、又独言を始めるんだって。

「今日は天気がいいね、うん、いい天気だね」って風に。

すっかりヨシオ君達は面白くなって、オットット君をからかってやろうと思ったんだ。

タカシ君が急に

「今日は天気がいいね」ってオットット君の真似をしたので、三人はケラケラ笑ったよ。オットット君はそれに気付いたけれど、タカシ君達には張合いがなかったんだらう。だってオットット君まで笑ってるんだもの。

それでタカシ君が

「なんだこんなもの」って言って、オットット君が見ていた草を引き抜いてしまった。

「だめだよ、返してよ」って、その時オットット君が

タカシ君に向かって言ったものだから、面白かったタカシ君は又一本草を抜いたんだ。

すると、突然ワーッって叫んだオットット君が、タカシ君に組み付いて行って、カブリとタカシ君の肩に噛み付いたという事なんだ。

二人の足元には黒い土を付けた青い草が落ちていた。それをタカシ君は引っこ抜いたんだらう。山地先生はその草をゆっくり拾い上げて、ダラリとした葉っぱに少しの間だけ目を落したよ。そしてオットット君の方を見たんだ。

「喧嘩の原因はこれ？、どうしてタカシ君に噛み付いたりしたの」

「僕悪くないよ」

「でも人に噛み付くなんてよくないわ、そうじゃない？」

「タカシ君が僕のアオクン取ったんだ、アオクン悪くないのに取ったんだ、だから僕……」

「アオクンって、これのこと？」

山地先生は手に持った背草をオットット君に差し出しと言った。オットット君はコックリうなづいて、大事そうに背草を受け取ったよ。

山地先生はオットット君のことをしばらく見ていた。そしてほんのチョッピリだけど、山地先生の顔が優しく

ゆるんだように見えた。

それから山地先生はヒックヒックいっているタカシ君を見て、もう一度タカシ君の肩をハンカチで拭いた。

「タカシ君をお願いします」って言って山地先生は、一緒に来た先生に頼んだ。

それでタカシ君は保健室に連れていかれたんだけど、見物に来ていた子供達は、みんなその後についていったよ。後には山地先生とオットット君しか残らなかった。

もちろん僕もそこに居た訳なんだけど。みんなが行ってしまふと、急に静になってしまふって、なんだか耳を両側から押されるような気がしたよ。

オットット君は背草の葉っぱの折れ曲った所を何度も何度も引き伸ばそうとしていた。山地先生は静にオットット君を見ていた訳なんだけど、しばらくして、

「ついて来なさい」ってオットット君に言ったんだ。

今までで一番優しい山地先生の声だって僕は思った。

「どこに？」オットット君は、ほんやり先生を見上げた。

「いいからついて来なさい」そう言って山地先生は、オットット君の手を取って歩き出した。

先生は学校の花壇の方へオットット君をつれていったんだ。そしてスコップと如雨露を持って来た。

「さあオットット君、それをここに植えてやりましょ

う」

オットット君は、しばらく山地先生を見て、それからコックリとうなづいた。オットット君は先生からスコップを借りて、手に持っていた青草をそつと植えたんだ。

「先生、でも大丈夫かなあ」ってオットット君は少し心配そうに、それから尋ねたよ。

「大丈夫よ、ほら、これに水くんで来てちょうだい」  
山地先生が如雨露を渡すと、オットット君は急いで駆けて行った。それは今までのどんな駆けっこの時よりも速かった。

新しく花壇に植えられた小さな植物は、グッタリと、土の上に寝ているように見えた。山地先生は土をかためなおし、オットット君が息を切らせて持って来た如雨露の水を静にかけてやった。

「雑草はね、どんなに踏まれても、いじめられても、強く生きてゆくものよ。この草だってきつと大丈夫よ、わかるでしょうオットット君」

「うん」

「こんな小さな草だって生きているのよね、オットット君は、それがわかる子なのね。小さな命を守ろうとしたオットット君立派だと思おうわ」

「先生僕・・・」オットット君は少しもじもじした。

「先生ね、そんなオットット君が嬉しいのよ。でもね、

オットット君がタカシ君にした事、いい事だったかしら」

オットット君の出っ歯がモワッって感じて唇の中に見えなくなってしまうた。オットット君のそんな真剣な顔を僕は今まで見たことがなかったよ。

オットット君はそのままうつむいて、足で地面をクルクルこね始めた。

「オットット君がタカシ君にした事、タカシ君がこのアオクンにした事と同じじゃないかしら」

山地先生はそう言って膝まづきオットット君の手を取った。

「悪い事したら謝らなくっちゃね」

「先生、僕、悪かったよ」

「そう、偉いわオットット君、タカシ君にごめんなさいって言える？」

「うん、僕、ごめんなさいって言う」

「よかった、先生、嬉しいわ」

そう言って山地先生はオットット君の肩をしっかりとかんで立ち上がった。

「でも先生」

「なあに？」

「タカシ君、アオクンにごめんなさいって言うかな」

「そりゃタカシ君だって悪いってわかれば、謝るわよ、アオクンもきつと元気になるわ。でもしばらくは毎朝お

水をあげなきゃね、オットット君できる？」

「うん、やるよ」

オットット君は嬉しそうにこたえた。

そんな事があつてからオットット君は、毎朝学校の花壇に水をやるようになったんだ。でも、クラスの中では、オットット君を見る目が急に変わってしまったんだよ。

タカシ君の肩はそれから長い間、オットット君の幽形が残って青くはれていたら、タカシ君のお父さんが学校にやってくるまで、大変に怒っていたって事も、なんとなく僕は知っていた。

それが大変な事件だったんだって事が僕の気持の中にあつて、タカシ君の痛そうにしかめる顔と、傷を見る度に、僕はタカシ君に対する同情と、オットット君に對する恐れを持ち始めたんだ。

おとなしい、何を言っても怒らなかつたオットット君が、誰も想像の出来ないような恐い事をする。それだけでクラスの仲間がオットット君の事を気味悪く思うのに充分だったし、オットット君がいつの間にかクラスの仲間から外されてゆくのも仕方ないことだったんだ。だって、誰もが、タカシ君のような目にあいたくないって思うんだもの。

女の子なんか、オットット君が近くに来ると、いやな顔して逃げ出してしまふし、男の子だって、オットット

君が真近に来ると、オットットって言つて逃げるんだ。それがみんなの氣に入つて、オットット君が近くに來るとオットットと言つて逃げるのがクラス中に流行つた位だ。

クラスの中で一人ぼっちのオットット君がすごく淋しそうに見えて、僕はその度にオットット君に話しかけるんだけど、そうすると必ず、タカシ君が僕を遊びに誘うんだ。

行かなかつたら、次から遊びに入れてもらえないから、僕はいつもタカシ君について行つたよ。

そんな風にして、オットット君は本当にクラスの除け者になつてしまつたんだ。

山地先生が、みんなで仲良くしなさいって言うけれどこればかりはだめさ、僕の氣持がそうだったんだから。オットット君は教室の中ではいつも隅っこに居るようになった。窓ぎわに立つて、ほんやり外を眺めているんだ。

そこからは二人が喧嘩した空地がすぐ下に見えるばかりで、学校の金網塀の向うには、古ぼけた家並が続いていて、遠くかすんだ所に灰色の山が見えていた。

丸い牛乳びんの底のようなメガネの下の近眼の目に、どんな表情が動いていたのかよく確かめる事は難しかつたけれど、ほんやりとか、はつきりとか、よくわから



ないままにオットット君は、窓外の光景に顔を向け続けるのだ。

ほとんど気に止めなくなったオットット君の姿をふと認める時、それは淋し気な窓ぎわのオットット君だった。

僕達は密かにオットット君の事を、窓ぎわのオットット君と呼んだ。それはある意味で、オットット君に対する同情も含まれていたのではないだろうか。

事実あの事件が僕達の記憶から薄れ始める頃には、窓ぎわのオットット君と口にする僕達の言葉の中に哀し気なおいを、僕は感じ取る事も出来たんだ。

そのうちに長い夏休がやって来た。通知表を持って、みんなはめいめいに、解き放たれた嬉しさを押え切れなればかりに元氣よく校門を出た。

オットット君が珍しく僕に話し掛けて来たよ。僕は気軽に応えた。するとそこに、一緒に帰ろうってタカシ君達が駆けてきたんだ。僕は仕方なくタカシ君達の仲間に入った。

オットット君が何かとつても話したそうにしていたんだけど、家に帰ったら、近くの池にフナ釣に行く事をタカシ君と約束していたし、なんだかそんなタイミングになっちゃったから、そのままオットット君を残して、僕はタカシ君達と駆けて行ったんだ。

それが、オットット君を見る最後になるなんて、僕だ

けじゃなく、タカシ君だって考えもしない事だった。

長い休みが済めば、きつとオットット君も元のようにクラスの中に戻れるだろうって、僕はオットット君の事を思い出す度に考えていたんだ。

もちろんなんとなくそんな風に思うだけだったし、夏休の間、そう度々オットット君の事を思い出した訳じゃない。

ふと、トイレにいる時とか、空地の草を見た時なんかに思い出すぐらいのものだったんだけどね。

長い夏休と言ったって、君も知っているとおり、夏休程早く日の過ぎてゆく季節はない。まだ半分も遊ばないうちに、もちろんだから勉強なんかほとんどのしないうちに夏休は終わってしまったよ。

その新学期の始に、僕達はオットット君が転校していた事を知らされたんだ。

「お父さんの仕事の関係で、残念ですが転校する事になりました」

そう伝える山地先生の顔がすぐくこわばって見えたよ。クラスのみんなは一瞬静まり返ってしまった。本当言うと、誰もが山地先生の話はどう受け止めていいかわからなかったんだと思う。嬉しいとか、哀しいとか言うよりもただみんな、びっくりしたんだ。

しばらくしてタカシ君が言った。

「先生、オットット君は退学ですか？」

みんなは思い出したように、ドッと笑った。退学と言う言葉があちこちから出て、ワイワイとクラス中がわき立ち始めた。

「静にしないよ！」

先生がパリパリンの声になって叫んだから、僕はシュンとなってしまった。

「オットット君の事をそんな風に言うものじゃありません。どうしてオットット君が退学しなきゃならないの」  
先生にそう言われて、僕はもう何も言う事が出来なかった。

それから先生はオットット君の事を話し始めたんだ。オットット君は心の暖かい子だったって事、オットット君がいつも汚れた服を着ていたのは、お母さんが、いかなかったと言う事、オットット君のお父さんは、大きなビルやダムを建てる仕事をしているって事、だから仕事に済むと又新しい仕事のために家を変って行かなければならないって事、そしてその度に、オットット君は転校しなければならなかった事、今度は遠くの山に発電所を造りに行って、オットット君は山の学校に変わって行って事。

僕は一学期が終わった日、オットット君が話し掛けてきた時の顔を思い出したよ。

あの時、とっても何か話したそうにしていたのに、僕は又ねって言って駆けて行ったんだ。あの時、オットット君はきっとそんな話をしたかったのじゃないだろうか。僕はすごく悪い事をしたように思った。もう二度と合えないんだったら、タカシ君達と一回や二回ぐらい遊べなくなっちゃって、オットット君、と一緒にいてあげればよかった、なんて今更思ったって逆い事なんだけど。

僕はオットット君の事をすごくかわいそうに思った。オットット君にお母さんがいないって話は、もうむちゃくちゃに哀しいものにしたよ。

見られたら恥しいから涙は流さなかったけれど、僕は心の中でゴメンってオットット君にあやまったんだ。

オットット君のいない教室はなんだかガラんとした感じだったし、オットット君のいない窓ぎわは、本当に淋しそうだった。だから時々僕はその窓ぎわに立って見た。そしてオットット君がしていたように、ほんやりと外を眺めるんだ。

金網越しに家が見えた。その二三軒向うに物干し台があって、白いエプロンをした女の人が、乾物をしているのに僕は気付いたんだ。

その時ふと、もしかしたら、オットット君は、あの女の人を見ていたんじゃないかなかったのだろうか、僕は思った。

白いエプロンの女の人は、テキパキと、気持良く働いて、そのうち下におりて行った。僕は女の人が見えなくなるまで窓から見ていたんだ。

「ドッチボールする者よっといで」そんな声がグランドの方から聞えた。

僕は元気よく外に飛び出して行ったよ。

こうして窓ぎわのオットット君は僕達の前からいなくなってしまう。そして僕の話も、もう終る訳なんだけど、最後に一つだけ僕達が冬を越して、六年生になった春の事を聞いてほしいんだ。

五年生も終りの頃になると、そろそろませた子は中学校の話なんかしたものだ。中学校では英語と言うものを習うんだって言って、みんなは噂をし合った。

「ビッグ」とか「ペン」とか「ピーチ」とか、僕は新しい言葉に随分興味を覚え中学校と言うものが次第に具体的なものとして感じるようになっていた。六年生になれば、もうあと一年であった。

その六年生の春がやって来たのだ。僕達の胸は期待と不安のために、にわかになくなったような気がする。

そんな新学期が始まって間もない頃、山地先生は僕達全員をグランドに集めた。

「やっとうさいたわ」

そう言って山地先生はグランドの隅の花壇の方に歩いて行った。

僕達は先生の後について行ったよ。先生の視線の止った花壇の土の上に、可愛い花が咲いていた。

「ワアームラサキスマイル」って誰かが言った。

「カワイイッ」

女の子が花壇の前にしゃがんでほう杖をついた。

小さな紫の花がお辞儀をするように、葉っぱの付け根から三本、可憐に咲いているのだった。

「みんな、オットット君の事覚えてる？」先生はそう言った。

その時、僕の心の中でイナズマのような感動が起った。

「これはオットット君の花よ」

みんなはキョトンとして、山地先生の顔を見た。

「オットット君がタカシ君に噛み付いた事あったわね、人に噛み付くってよくない事だったけど、でもね、ごらんなさい。オットット君はね、この花を守ろうとしたのよ」

スマイルの花が少し恥しそうに揺れた。誰もお喋りをする者がなかった。

「タカシ君」

先生は、タカシ君に向かって優しく言った。

「あなたの肩の傷はね、この花のためにつけられたの。」

きれいなじゃない、オットット君のおかげで、このスマイレは今年も花を咲かす事が出来たんだわ」

僕はスマイレの花を見ているうちにオットット君のニコニコ笑っている顔が花の中から覗いているように思ったんだ。

長い間誰もが、心を捕えられているようだった。

「僕、悪かったよ」しばらくして、タカシ君が言った。

「僕も」

「僕も、悪かったよ」

ヨシオ君もイチヒロ君も言った。

「オットット君、ごめん」

女の子が少し涙ぐんで言った。

みんなはそれに動かされてしまった。

オットット君の事を除け者にしたあの日の事を、みんなは思い出していたんだ。

でも、オットット君はもういなかった。

「よかった」

先生は言った。

「みんながオットット君の事わかってくれたから、きっとこのスマイレも喜んでくれると思うわ」

みんなは泣いていた。それから、オットット君の花の

周りにみんなで花を植えようって言い出したのは、タカシ君だったと思う。僕はめいめい花の種を持ち寄って、

それを花壇に植えた。

山地先生は「オットット君と六年B組の花壇」って立ててくれた。僕はB組だったんだ。

それが僕達の卒業記念になったし、僕は中学校に進んだ春には、花壇一杯の花が僕達の心の中にまで溢れるように咲きほこった。

小学校の、ほんのわずかの間だったけれど、こうしてオットット君との思い出が、僕達にとって、どんなにきれいな花に満ちたものになった事か。

そしてこれが、僕達の一人一人に、どんな掛替えのない思い出になった事か。

もしもどこかで、いつかオットット君に会う事ができたら、僕は二人で、今ではあの時の僕達のような子供の母親になっている山地先生に真先に会いに行きたいと思っ

